

死んでいたことを知らなかった

死者のヴィジョン

齋藤 忠賢

問題の所在

臨終の床にある人が、死んだ肉親や友人のヴィジョンを見るという話は昔から知られている。臨床死（脳死・心拍停止・呼吸停止・意識喪失等）の前の臨床の床にあるばかりではなく、臨床死後の臨死体験者も死者のヴィジョンを見ることが、最近の研究で分かっている。一般的にはこうした現象は、死にかけている人が死に対する恐怖から、自分を保護してくれる両親や宗教的人物を求める願望と、脳の異常（酸欠等による）によって作り出される幻覚であると思われる。しかし、もし願望説が正しいとすれば、死に行く人は、人間の内ではまず誰よりも母親や配偶者や自分の子供のヴィジョンを見るはずであるが、実際には必ずしもそのようになっていない。しかも死に行く人が見るヴィジョンが、既に死んでいる人だけであり、まだ生きている人は現れる事はないという可能性が大きい。例えば、ターミナルケアの世界的権威者である E. Kubler-Ross は、長い自らの経験から、死に行く子供の 99%は両親のヴィジョンを見るはずであるのに、その子供が親が死亡したのを知らない場合でも、親がすでに死亡している場合以外は親を見ることはなく、例え 1 分であっても先に亡くなっている人を見る例しか知らないと主張している。¹⁾ また体外離脱現象を本格的に研究した R. Crookall は、死に行く人にまだ生きている人が現れたという例は、報告されていないと指摘している。²⁾

これに対して、臨終の床にある人が見るのは、既に死んでいるだけでなく、まだ生きている人も含まれているという調査結果もある。³⁾ もし生者も含まれるというのであれば、幻覚説で一件落着ということになるが、そもそもデータを集める上での基準が、どの程度厳密なものであったかに問題があろう。死に行く人達が見るヴィジョンといったような科学的な研究が殆ど進んでいない分野では、そのような信頼のできる厳密な基礎的データの収集も、未だになされていないというのが現状である。まず第一に健常者の夢等は、生者の方が死者よりもはるかに多く現れるというデータから考えると、⁴⁾ 夢の例が紛れ込んでしまっているのではないかという疑いがある。臨終の床にある人間の状態と、そうでない通常の人間の状態を明確に区別する境界線がある訳ではないので、両者を峻別することは実際には困難であろう。第二に臨死体験の中には、本人が人生を走馬灯のようにフラッシュバックするという現象があり、そのシーンの中には当然まだ生きている人も登場するであろうから、単に生者が現れたと言っても、本人の過去の一場面で登場したのか、あるいは

はそういうこと関係なしに、今世に死のうとしている本人を迎えに現れたのかを、厳密に区別する必要がある。第三に、数は少ないが、臨死体験者の中に同じ時間帯にやはり臨死体験をしていた人と出会った人もいる。二人とも死なずに生還しているので、この場合、データ上は生者と出会ったということになってしまう事になる。

死に行く人には、臨床死の前後を問わず、すでに死んだ人しか現れないということは、以下の本論での例の考察から分かるように、その人が死んでいたことを知らなかった知人が死に行く人に現れた時、本人は例外なしに、その知人が既に死んでいると確信しているという事実からも示唆されている。何故なら生者も現れるのであれば、本人はその知人が死亡したことを確信するはずがないからである。

しかし、死に行く人が見るヴィジョンが死者のみであっても、それが脳が作り出したイメージ現象（幻覚）ではないとは言い切れない。何故なら、人間には本来、死んだ人に再会したいという願望があるので、死を覚悟した本人が、無意識の内に死者のイメージを喚起している可能性があるからである。死者に関する記憶や、本人が生まれる以前に既に死亡していた人も場合でも、その人の写真等による記憶が、夢に見られるように現実の記憶がデフォルメした形で現れることが十分考えられる。⁵⁾ この場合には、死者はその容姿や衣服に至るまで昔の記憶そっくりに現れ、生きた人間のように動き会話をし、ストーリーが展開するケースがある。側頭葉癲癇の場合には、発作中に亡くなった記憶がよみがえり、母はその癲癇患者の名前を呼んだという事例や、⁶⁾ 戦死した父が軍服を着たまま現れたが、薬物療法後には出現しなくなったという例が報告されている。⁷⁾ 麻薬中に死んだ兄が幾度も自分を覗いたという体験をした患者のケースは、亡くなった兄の記憶と、時々瞼を開いて患者の瞳孔を観察していた麻薬科医の記憶が、麻薬が原因で、脳内の記憶と記憶の統合過程に混乱が生じたために混同されてしまったために生じたものと思われる。⁸⁾ 片山龍男という医師は、心筋梗塞が原因で頻脈→不整脈→心拍停止となったが、頻脈になった時に、まず目の前に心電図が現れたが、次に唐招提寺が、初めは絵葉書の様な写真として出現し、次に自分がその中に入ってしまった、すぐに近くから唐招提寺を見ているという感じになったと自分の経験を報告している。この人は以前、唐招提寺を見に行ったことがあると言う。⁹⁾ このケースの場合注意しなければならないのは、唐招提寺が現れたのは、恐らく心肺停止になる前のことがあったと思われる点である。つまりこれは、臨床死後の現象ではなく、厳密な意味での臨死体験ではない。中原保は急性膵炎のために2ヵ月間昏睡状態が続いたが、その間に死んだ祖母が、いつも見ていた自分の部屋に飾ってある遺影とそっくりに現れ、「こっちに来たらダメだ。戻りなさい」と叫んだという。¹⁰⁾ 立花隆も指摘しているが、このケースのように現れた死者が写真のように不動のままというのは、臨死体験者に現れた死者は、生きているように動くという点から考えると異例である。¹¹⁾ 2ヵ月も昏睡状態が続いたと言われるが、昏睡状態中の中原保は遺言状を書いたこともあり、¹²⁾ 一体どのような意識状態の時に祖母のヴィジョンを見たのかは正確には分からない。これは厳密には臨床死前に見た夢の可能性が強い（中原保本人も、これを夢と判断している）。祖

母の声が聞こえたというのは、考想化声という現象が、祖母のイメージと結合したものと解釈することができようか？¹³⁾ 大平満は胃潰瘍が悪化して吐血し、5日間意識を失ったり、取り戻したりした状態が続いた。最初に見たのは、水と川で、向こう岸に渡ると、写真でしか見た事がない先代が現れて、「お前はまだ来るな。向こうに橋があるから戻りなさい。」と言って途中まで送ってくれた。すると、苦しくなって意識が戻ったという。¹⁴⁾ この例の場合注目に値するのは、このヴィジョンを見た後で、体外離脱体験をしているが、これと川を見たヴィジョンとの間には脈絡はないという。¹⁵⁾ ということは、川岸で先祖が現れたのは、通常意識が回復する直前に見た夢である可能性が強いのではないかと考えられる。もっとも写真を含めた故人の記憶のままにその人が現れたからといって、ただちに脳が作り出したイメージ現象（幻覚）ということにはならない。というのは、死に行く人に、自分が誰であるかを分からせるためには、何らの死人の生前の面影を留めていなければならないからである。

ところで、何らかの仕方で記憶のある死者のヴィジョンを見るときも、死者が全員現れる訳ではない。願望説が正しければ、大多数の人間は、その人の母親のヴィジョンを見るはずであるが、実際には母親が他の死者達よりはるかに多く現れている訳ではない。それとも故人に関する記憶の鮮明度によってどの死者が出現するかが決まっているのであろうか？例えば臨床の床にあった人に、死んだ時と同じ姿で、父と二人の兄弟が現れたが、死んだ母が現れなかったのは、母は大分昔になくなっていたので、母のことは余り、記憶に残っていなかったが、父と二人の兄弟とは、母の死後ずっと一緒に生活していたのが原因と考えられる事例がある。¹⁶⁾ しかし記憶の鮮明度だけによるのであれば、死亡してから時間の経っていない人程有利なはずであるが、実際にはかなり昔の、しかも写真でしか知らない（曾）祖父母が現れるケースが多い。これは夢でも最も親密な人のヴィジョンを必ずしも見る訳ではなく、それほど親しくない人が登場することと関係があるのだろうか？

それではどういうケースが論理的に考えて、説明のできないものであろうか？それは第一に死に行く本人が、それが誰なのかを知らない死者が現れ、その死者が自分から名乗りを上げるが、あるいは回復後その死者が誰であるかが、家族や友人等の話から初めて判明したという事例もあれば、それは写真を含めた故人に関する記憶によって説明できないであろう。もっとも本人が記憶にないと主観的には思っている、実際には無意識の内に残されている記憶（潜在的意識）もあるので、この点については慎重に吟味しなくてはならない。第二に、死にかかっている本人が、その人が死んでいたことを全く知らなかった知人が現れた事例は、死者に関する何らかの記憶がある場合でも、やはり説明ができないと言えよう。勿論現れた死者が以前から重病であったことを、死に行く本人が知っていたのであれば、その人の死は予想できたであろうから、そのような例は、対象から外さなければならない。

死者に関する記憶がある場合でも、説明不可能と思われる以上の二つのケースに対して、最後の説明として、それは単なる偶然であるという可能性が残っているが、上記のよ

うな事例が多数ある場合には、すべてを偶然であると切って捨てるのは困難であろう。また我々としては、テレパシーの存在が科学的に説得力のある仕方を実証されているとは考えていないが、死にかかっている本人が、出現した人が死んでいたことを全く知らなかったとしても、ベッドの周りにいた人達が、出現した人が死亡したことを知っていたとすれば、本人はテレパシーによって知ることが出来たのではないかという可能性も一応反論としては考えられよう。¹⁷⁾ そこで死に行く本人は勿論、まわりの人達もその人が死んだことも知らなかったし、予想も出来なかった死者の出現した例が、この世界内の事象として科学的に説明するのが困難なケースということになる。周りの人達が死にかかっている本人に現れた死者がすでに死んでいたことを知っていた場合でも、本人がその死者の出現に驚いて、その知人の死を確信したり、周囲の人にその人の生死を問い正している場合は、その本人の反応から見て、出現した人が死んでいることを、周りの人から事前にテレパシーによって情報入手していなかったことは確かであるから、このようなケースも通常の科学では説明が難しいであろう。

以上の議論を踏まえて、以下ではまず第一に、死に行く本人が全く知らない死者が現れ、その死者が自ら名乗りを上げるか、あるいは後に家族の人達等の話からその人が誰なのかが、判明した事例を取り上げ、次に死にかかっている本人は勿論、ベッドの周りにいた人達も、その人が死んでいたことを知らなかったし、予想もしていなかった死者が出現したケースを扱い、最後に死に行く本人は、その人が死んでいたことを知らなかったし、予想もしていなかったが、ベッドの周りにいた人達は、そのことを知っていたが、本人の反応から見て、テレパシーによって周囲の人達から、その人が死んだという情報を事前に入手していた可能性がない死者が出現した例を考察してみよう。テーマの性質上、データの信頼性に問題があるので、最近のデータを中心に学問的に信頼のできる事例に絞って考察の対象とすることとする。データの信頼性の基準は、超心理学上の特定の前提を持たないで、科学的に中立の立場からアプローチしている研究者によるもので、その研究者が、その事例が捏造されたものではなく、実際に起こった事象を正確に伝えていることを保証しているものであるという点にある。

事例の分析

(I) 本人が知らない死者が出現したケース

まず第一に、死に行く人に本人が知らない死者が現れ、その死者が自分から名乗りを上げるか、あるいは本人が回復後、家族の人達等の話から、その死者が誰なのかが判明したというケースを取り上げる。本人がその死者のことを忘れてしまっていたが、無意識の内に記憶していた可能性に対しては十分考慮しておく必要があるが、潜在的記憶の可能性もない場合には、このケースは本人の何らかの故人に関する記憶によってその死者のイメー

ジが作り出されたという説明は妥当しないことになる。

- ① 最初の事例は、ワシントン大学医学部助教授の **M.Morse** が臨死体験の研究書の中で報告しているものである。「白血病で死んだ少年が死ぬ前に見たあるヴィジョンの中で、ある男性と出会う。この男性は、その子供の母の元ボーイフレンドだと自ら名乗った。そして自動車事故のため歩行が不可能であったが、今は歩くことができると母に伝えてほしいと頼んだと言う。このことを聞いた母が電話して確認してみると、そのボーイフレンドは、この少年がこのヴィジョンを見たその日に亡くなっていたことが判明した。母はこの男性については、この少年に話したことは一度もないという。」¹⁸⁾ この例は臨床死前のものである。この事例の難点は、母の元ボーイフレンドが死んだ時刻と、少年がこの男性のヴィジョンを見た時刻が記されていないという点である。
- ② 次の例は 1977 年自ら 3 回の臨死体験をした **P.M.H.Atwater** という臨死体験の研究者自身からのものである。「彼女は 2 回の臨死体験の時、体外離脱をした後で、死んだ自分の祖父に会った。祖父は彼女が生まれる前に亡くなっていたので、会ったことはない。”私はお前のおじいちゃんだよ”と名乗りを上げたので、自分の祖父と分かった。回復後、祖父のことを知っている人に尋ねてみると、確かに祖父は彼女が見たような容姿をしていたという。」¹⁹⁾ これは臨死体験（臨床死後）のものである。この例の場合、生前の祖父に会ったことはなくても、写真や話から祖父の容姿の記憶が残っていたが、本人がそのことを忘却してしまっていたのではないかが気掛かりであるが、記述からは不明である。
- ③ ターミナルケアの世界的権威者である **E.Kublar-Ross** が報告している例。「12 歳の女の子が臨死体験をして、そのことを回復してから父に話した。彼女は兄さんと出会い、兄さんは優しく自分を包み込んでくれたが、私には兄さんがいないからおかしいと言った。それを聞いて父は彼女が生まれる 3 ヶ月前に死んだ兄がいたことを、この時初めて彼女に打ち明けたという。」²⁰⁾ これは臨死体験（臨床死後）のケースである。この事例では、どうしてその女の子は、彼が自分の兄と分かったのかが記されていないが、他の類例から推定すると、自分の方からお前の兄だと名乗りを上げたものと思われる。この女の子が、父以外の人から自分が生まれる前に死んだ兄がいたことを聞いていたが、そのことを忘却していたのかどうかも確認がとれていない。この女の子は、無意識の内に、兄がいてほしいと思っていたかどうかもチェックする必要があるが、報告からは不明である。
- ④ **Mally・Cox・Chapman** という学問的にも良識的な立場に立つ人の、1995 年に出版された臨死体験の研究書中に紹介されている例。麻薬剤は、脳の機能の一部を停止させ、意識を消滅させ、死のプロセスに似た状態を作り出す点に注意することが必要である。「麻薬が原因で、暗いトンネルを通過して、美しい光の世界に出るという体験をした女性が、そこで本人は知らない女性と出会う。その女性は薄い肌の背

の高い女性で、白くて長いスカートと白い上半身用の服を着ていて、その女性の顔立ち、星の付いた長い白い飾り帯を身に着けていた。このことを回復後両親に話すと、両親も娘の話をはじめの内は麻酔による幻覚と思っていたが、娘は曾祖母を知らないはずなのに、その女性はすべて生前の曾祖母とそっくりだったので、むすめがそうそばにあったことをしんずるようになったという。」²¹⁾ここでは本人は意識は消失しているが、臨床死前の状態に置かれている。曾父母のことを写真を見たり家族の人から聞いたりしていたことを、本人が忘れてしまっている可能性はないかと言う点は気掛かりだが、報告ではこの点については確認が取れていない。

- ⑤ 次の例も I.ウィルソンと言う良識的な立場に立つ人の、臨死体験の研究書に報告されているものである。「パキスタンのある少女が中毒が原因で死にかかると、医者である父が蘇生させた。臨死体験中その少女は、美しい庭園でおじいさんにとっても親切にしてもらった。おじいさんは“ここにいたいかい、それとも戻りたいかい？”と尋ねたので、”パパとママが悲しむから帰りたい。”と言った。その後半年してから、家族でアルバムを見ていると、突然その少女は”みて、これが私が庭園であったおじいさんよ。”と興奮していった。それは彼女の曾祖父で、彼女は会ったことも写真で見た事もなかったという。」²²⁾これは臨床死後の例である。この例の難点は、曾祖父の写真を見た事がなくても、この少女は家族の人から曾祖父のことを聞いたという可能性はないのかと言う点であるが記述からは不明である。

(II) 本人もそばにいた人もその人が死んでいたことを 知らなかった死者の出現

次にその人がすでに死んでいたことを知らなかった死者が、死に行く人に現れたケースを考察してみよう。テレパシーによって死にかかっている人が情報を入手できた可能性を排除するために、ベッドの周りにいた人達も、その人が死んだことを知っていなかった例のみを、ここでは扱うこととする。

- ① 「家族全員を巻き込む自動車事故で重傷を負った家族の人達は、別の病院に運ばれることがある。瀕死の重傷を負った子供たちには、不幸にしてすでに死んでしまった家族のことは、一切知らせない決まりになっている。にもかかわらずある子供は“もう大丈夫。ママとピーターが僕を待っていてくれるから。”と言ってから昏睡状態に陥り死亡した。その子の母親が即死したことは E.Kubler-Ross も知っていた。しかしピーターは別の病院に入院していて、E.Kubler-Ross が知っている限りだけはまだ生きていたはずであった。そのうちにピーターが数分前に亡くなったという電話が入った。彼女は長年にわたって世界中からこの種のデータを集めてきたが、死にかかった子供に現れた人はすべて、たとえ数分前であろうとその子供が死ぬ前にすでに死んでいた。まだ死んでもいない人のヴィジョンを見た子供は一人もいない

という。」²³⁾

- ② D.K.Corcoran という看護師も、これと似た例を伝えている。「家族全員が自動車事故に巻き込まれた。父は即死した。少年は意識不明のまま小児科病院へ、彼の母と兄は集中治療室へ運ばれた。その少年は意識が戻ると、“僕は死んで天国に行った。そこでパパと兄にあったが、二人は僕がここにはいけないと言ったので戻ってきた。”と看護師に行った。この看護師はこの少年の父が死んだことは知っていたが、兄は集中治療室でまだ生きていると思っていた。しかし彼女が集中治療室に電話をしてみると、その少年の兄は15分前にすでに死んでいたことが分かったという。」²⁴⁾ ここでは臨床死後が問題になっている。この例で注目になるのは、単なる願望によるならば、たいていの少年にとってはまず母親が現れるはずの所があるが、母親はまだ生きていたので、出現していないという点である。
- ③ E.Kubler-Ross が報告している別の例 「アメリカン・インディアンの少女が、ハイウェイでひき逃げされた。通りかかった人が車を止めて救助しようとする、その少女はそこから700マイル離れたインディアン居住区に住んでいる母に”私は大丈夫。今パパと一緒にいるから今パパと一緒にいるから幸せだと伝えてほしい。“と言いつつ残して、と伝えてほしい。“と言いつつ残して、死んだ。通りががりの人が彼女の母を訪ねると、彼女の父は娘が自動車事故で死ぬ1時間前に、インディアン居住区で心筋梗塞のために死亡していたことが分かったという。」²⁵⁾
- ④ 「スティーヴは27歳の時交通事故で首から下がマヒし、その後肺炎にかかって死んだ。彼の死後数週間後に、彼の友人ラルフの妻から手紙が届いた。その手紙によれば、最近ラルフががんで亡くなったが、死ぬ2・3週間前からヴィジョンを見るようになった。ラルフはスティーヴの体が不自由になったことも、死んだことも知らなかったが、スティーヴが死んだ直後に、ラルフは起き上がって“おい見ろよ、あれはスティーヴじゃないか！”と興奮して叫び、その直後に亡くなったという。」²⁶⁾
- ⑤ カナダのバンクーバー総合病院の医師による報告:「サンドラとクリシーという二人の少女が、癌のため同じ病院に入院していた。サンドラは、クリシーのいる病院から数百キロ離れた自宅で死を迎えるために退院した。二人の少女もその家族もその後互いに連絡は取り合わなかった。何か月か後に、サンドラは深い昏睡状態に陥った。それから数時間してから、サンドラは再び意識を取り戻した後に、“ママ、私は天国に行って来たのよ。クリシーが迎えに来てくれたわ。だから私は少しもこわくない。”と言った。サンドラの死後数日経ってからサンドラの両親は、クリシーがその数週間前に亡くなっていたことを初めて知ったと言う。」²⁷⁾ 明記されていないが、これは臨死体験(臨床死後)のものと思われる。サンドラは、すでに死んでいたことを知らないクリシーと出会った時、驚いたとは記されていないが、それはクリシーも自分を同じ癌にかかって入院していたことを知っていたので、クリシーの死を

予期することが出来たからかもしれない。

- ⑥ **R.Moody** (臨死体験の科学研究を初めて行った精神科医) による事例:「ある男性が心臓病のため臨死状態に陥った。その人の姉も糖尿病性の昏睡状態のために、その同じ病院の別の病室で臨死状態になった。この男性は、体外離脱をすると、姉が自分と一緒に病室の隅の上の方にいるのに気づき、姉と下で行われている治療の様子について話す。その内に、姉が彼から離れて行くので、後を追って行こうとすると、“お前はまだ順番ではないから、来てはいけない。”と言って、暗いトンネルを通過して遠くの方へ行ってしまった意識が回復すると、この男性は“姉が亡くなった。”と言うと、医師は“そんなことはない。”と答えた。しかし、余りにしつこくこの男性が言うので、看護婦に調べさせたら、姉は事実死亡していたことが判明した。このことが事実であるという点は、その後その場にいた医師から確認をとっているという。」²⁸⁾ これは臨死体験(臨床死後)のケースである。この例の場合、この男性が、姉のヴィジョンを出現に対して驚いたかどうかは記されていないが、姉も同じ病院に入院していたことから見ると、この男性は姉の病状についても知っていた可能性が十分あるものと思われる。もし知っていたのであれば、姉の死は予期し得た事柄であったので、彼は驚かなかったのかもしれない。

- ⑦ 次の3つの例は、臨終の人がよく見るヴィジョンを初めて本格的に研究した **W.Barrett** (物理学教授) のものである。:「ある少女が臨終の床についていた。突然上を見て“スーザンとジェーンとエレン。”という。まるで同じ病気ですでに亡くなっていた3人の姉妹が現れたのを見ているかの様であった。しばらくして、その少女は“エドワードもまた。”と言った。兄のエドワードはインドで元気に暮らしているものとばかり思われていたので、エドワードが死んだ仲間の中にいるのに驚いた様子であった。その後エドワードの突然の死を知らせる手紙がインドから届いた。エドワードはこの少女が息を引き取る1・2週間前に事故で急死したと言う。」²⁹⁾ ここでは臨床死前のヴィジョンが問題になっている。急死したことを知らない兄が現れたので、この少女は驚いているから、兄の死を全く予期していなかったことは確かであろう。

- ⑧ 「娘は、亡くなる2・3週間前に父に、ベッドの近くに何人かのすでに死んでいる家族の者が見えると言った。父親は、それは幻覚だと言ったが、娘はそうではないと言い、その中には彼女の兄もいると言った。兄は423kmも離れたSisalの港の灯台で働いていて、数日前にも元気であることを知らせてきたばかりなので、父は娘が幻覚を見ているのだと確信した。娘はその日の夕方に息を引き取った。翌朝父親は、息子の急死を知らせる電報を受け取った。その息子が死んだ時刻には、娘はまだ生きていたことが分かったという。」³⁰⁾ これは臨床死前のケースである。急死していたことを知らなかった兄のヴィジョンを見た時の妹の反応は、特に記されていないので分からない。

- ⑨ 「Z夫人はパーティのために歌の上手な女性を探していたので、この事例の報告者が知人の娘ユーリアに一週間来てもらった。Z夫人はその後ユーリアに会っていない。ユーリアは歌手として世に出ることもなく、その後ある男性と結婚した。それから6・7年後に、Z夫人は病気で臨終の時を迎えていた。死の前日にZ夫人は完全に意識を保っていて、私とビジネスのことを話していた。すると突然Z夫人は“歌う声が聞こえない？”と尋ねたが、私には何も聞こえなかった。“今日は何回か歌声を聞いた。これは天使の歌声だと思うが、私の知っている歌声がその中に混じっているのが奇妙だ。”そして突然Z夫人は私の頭上を指して、“どうしてユーリアが部屋の隅にいるの？”と叫んだ。私には何も見えなかったので、臨終の人の幻覚だと思った。しかし二日後にユーリアの死亡記事を新聞で見て、私はびっくりしてユーリアの父に問い合わせた。“娘は産床熱のために亡くなった。死んだ日は朝から死ぬまで歌い続けた。”と父は言った。

ユーリアは1874年2月2日朝6時頃死亡。Z夫人は1874年2月13日夕方の4時頃に死亡。ユーリアの死亡記事を私が見たのは、1874年2月14日である。Z夫人は生前幻覚を持ったことは、一度もないという。」³¹⁾ これは臨床死前の例である。ユーリアが現れたので、Z夫人は驚いているから、Z夫人がユーリアの死を全く知らなかったばかりではなく、予想もしていなかったことも確かであろう。これは死者のヴィジョンを見ただけではなく、その死者の歌声を聞いたという点で、特異なケースと言える。歌いながら死んで行ったユーリアの息を引き取った日(2月2日)と、Z夫人がユーリアの歌声を聞いた日(2月12日)が一致していないが、これはZ夫人の臨終の時が、ユーリアの死んだ日からずれていたためと考えられる。

- ⑩ 次の例は、死後の命に関する古典的名著とされるF.W.H.Myersからのものである。：「1887年10月3日の夕方の5時から6時の間、娘は臨終の時を迎えていた母のそばにいた。母は誰かが外にいて中に入りたがっているからドアを開けるようにと頼んだ。娘は“ドアは開いているし、外には誰もいないわよ。”と言って、ドアを広く開いてから閉めた。母は“可哀想な息子のエディ、彼は重病らしい。彼は落下した。”と言った。娘は“ママどうしたの？エディは元気だって聞いたわよ。”と母に言った。翌朝、母は息を引き取った。その後、手紙が届いて娘は兄弟のエディが馬から落ちて、母がエディの姿を見たのと同じ日のほぼ同じ時刻に、オーストラリアで死んだのを初めて知ったという。」³²⁾ ここでは臨床死前のヴィジョンが問題になっている。母親が息子のヴィジョンを見たのと、息子が死亡した時刻が大体一致しているというのが事実だとすれば、単なる偶然の一致と考えるのは困難であろう。息子が現れた時、母親が驚いたかどうかは不明である。
- ⑪ K.Ringによる例「ある女性が臨死体験をし、暗いトンネルを移動していると、男性の友人が戻ってくるのを見た。二人が接近した時その友人は、自分が戻されたというのを彼女に伝えてきた。回復後彼女が臨死体験をしていた時間帯に、この友人

は心臓停止していたことが分かったという。」³³⁾ これは二人が同じ時間帯に臨死体験をして、暗いトンネルの中で出会ったという例である。二人が互いに相手が臨床死をしていたことを知らなかったことは間違いない。

- ⑫ R.Crookall からの例：「W.Gerhardi という男性は、体外離脱して友人と出会う。おかしいと思ってその友人の家に行ってみると、ベッドに寝ているその友人が息をしていないことが分かる。私と一緒にベッドの自分の身体を上から見下ろしているその友人のダブルが生きている友人であった。再び自分の体に戻ったのちに、その友人が手術のために麻酔を受けたが、麻酔から目覚めずに死んでいたことが分かった。」

³⁴⁾

- ⑬ 「ある女性が臨死体験をして天国のようなところに行き、そこでトムと言う若い男性に出会ったので、驚いて “どうしてここにいるの？” と言う。トムは丁度今ここに着いたばかりだと言う。この女性は病院に戻り、自分の身体を治療している医師を見てから、自分の体に戻った。回復してから臨死体験をしたその晩に夫が、トムが自動車事故で急死したことを知らせる電話をもらっていたことが判明したという。」³⁵⁾ これは臨死体験（臨床死後）のケースである。この事例の場合、問題の女性はトムに出会ったことに驚いていて、どうしてここにいるのかと尋ねているから、事前にトムの死に気付いていたことも、予想もしていたこともないことが分かる。この例の難点は、トムの死亡時刻と、この女性が臨死体験中トムに出会った時刻が一致しているかどうか、またトムの死を知らせる電話を夫が受け取った時刻と、この女性の臨死体験の時間帯との関係が正確には不明な点である。

- ⑭ 立花隆による事例：「ジョンという男性が心臓発作が原因で臨死体験に陥り、体外離脱をすると強烈な光が現れ、その光の真ん中がポツカリ開くと、彼の妻のダスティが現れ、ジョンに向かって手を振った。妻の方に近づこうとするとダスティは遠ざかって行き、やがて見えなくなってしまった。意識が回復すると、ジョンは “ダスティが死んだ。” と喚き出した。ダスティは末期癌で、自宅で死にたいと言って自宅にいた。看護婦はジョンの容体をダスティに伝えていたので、“ダスティはまだ生きているわよ。” と答えた。しかしその後、ジョンが臨死体験中にダスティに会った時刻に、妻は死んでいることが分かったと言う。」³⁶⁾ ここでは臨死体験（臨床死後）が問題になっている。この例の場合、夫が妻の病状を知っていたとすれば、夫は妻の死を予期することは出来たであろう。そうだとすれば、その予感がたまたま一致したということも十分考えられる。しかし、夫が臨死体験中に妻のヴィジョンを見たのと同じ時刻に、妻が死亡したというのが正確な情報だとすれば、単なる偶然の一致と考えるのは、難しいように思われる。

(Ⅲ) その人が死んだことを本人は知らなかったが、 そばに居た人は知っていた死者の出現

最後に、その人が死んでいたことを死に行く本人は知らなかったけれども、そばにいた人達は知っていたが、そのことを死にかかっている本人には内密にしていた死者が、死に行く人に現れたというケースを考察する。ここでは、そばにいる人からテレパシーによって、その人が死んだという情報を事前に入手することが出来たかどうか、あるいはその人の死を予期出来たかどうかを慎重にチェックしなければならない。

- ① ターミナルケアに携わっている看護婦が報告している最近の事例：「臨終の床についていたある男性に、母と妹のヴィジョンが現れた。母は数年前に死亡していたが、妹はまだ生きているものとその男性は思っていた。実際には妹は、その男性が死ぬ間際に会った時に急死していたが、夫の容体が悪化するのを恐れて、夫が自分の妹の安否を尋ねた時も、妻は夫の妹は元気だと答えた。しかし妻の主張にも拘わらず、この男性は、自分の妹は死んでいると思いつけたと言う。」³⁷⁾ これは臨床死前のケースである。この例では、夫が自分の妹の安否を妻に尋ねているから、事前に妹の死をそばにいた妻からテレパシーによって情報入手したのでも、妹の死を予期もしていなかったことは確かであろう。
- ② 次も末期医療に携わっている看護婦による最近の例である：「死の間際にあつたスーという中国女性に、数年前に亡くなった夫が妹と共に現れた。スーは自分の妹が中国で生きていると思っていたので、妹も一緒に現れたのは奇妙だと看護婦に言った。そこでこの看護婦は、ベッドのそばにいたスーの娘を離れた所に呼んで尋ねると、スーの娘はスーの妹は二日前に死んだが、スーが重病なので家族の者はスーにはこのことを内密にしていたことを打ち明けたと言う。」³⁸⁾ ここでは臨床死前が問題になっている。スーの妹のヴィジョンを見た時、死んだ夫と一緒に現れたのは奇妙だと思っている点からみて、事前にテレパシーによって妹の死の情報を入手していなかったことも、妹の死を予想もしていなかったことも間違いないであろう。
- ③ M.Morse が報告している事例：「出産時の出血で臨死状態に陥った女性が、体外離脱してトンネルを通過して光に近づくと、親しい友人が現れた。その人は、この女性の家族が以前住んでいた町の近所の人であった。その友人は、この女性に戻るようと言った。彼女が身体に戻ってから3週間後に、出産したその日に、その友人が事故で突然亡くなったことを、夫から聞いて初めて知ったと言う。」³⁹⁾ これは、臨死体験（臨床死後）のケースである。出産した女性は、友人の急死を出産後3週間してから初めて知ったと言っているから、友人の死を事前にテレパシーによって夫から情報入手したのではないことは明らかであろう。その友人は事故で突然亡くなったのだから、その死は予期出来るものではなかった。
- ④ 次の事例は、臨終者の見るヴィジョンの本格的な研究をしたら W.Barrett が、この

現象に関心を持つきっかけとなったものである。このケースには、綿密な証言が得られているので丁寧に紹介してみよう。「ドリスは赤子を無事出産したが、死にかかっていた。突然ドリスは、部屋のある部分の方を見つめて、顔つき全体を輝かす様な晴れ晴れとした微笑みを浮かべて、“素晴らしい！素晴らしい！”と言った。付き添っていた W.Barrett 夫人が“何が素晴らしいのか？”と尋ねると、ドリスは“素晴らしい輝き、素晴らしいものを私は見ている。”と答えた。それからある場所にもっと注意を向けると、“どうして父が？父は私が来たのでとても喜んでいる。夫さえいけば申し分ないのに。”とドリスは、ほとんどは歓喜の声をあげて叫んだ。生まれたばかりの赤子を連れてくると、ドリスは“赤ちゃんのために、私はここに留まらなくてはならないと思うか？私はここに留まることは出来ない。私が見ているものを、あなたも見る事が出来れば、私がここに留まる事が出来ないことが、あなたにも分かるわ。”と言う。」(ここまでは、ドリスを看護していた W.Barrett 夫人の証言による。そばにいた研修医も、この証言が正しいことを認めている。)
「ドリスの夫と彼女の母がそばに付き添っていた時、夫がドリスの上にかがみこんで話しかけると、ドリスは夫をサイドに押しやって、“それを隠さないで。それはとても素晴らしい。”と言う。それから私の方を向いて、“どうしてヴィーダがいるの？”と言った。ヴィーダというのは、3週間前に死んだドリスの姉であるが、姉の病気と死はドリスには内密にされていた。」(ここまでは、そばにいた看護婦長による証言。)
「ヴィーダは数年間病気をした後、1923年12月25日に死亡した。ドリスが死ぬ2週間と4日前のことであった。ドリスは重病だったので、姉の死はドリスに知らせるのは良くないと考えられた。ドリスを見舞う時は、喪服を脱いで普段着にした。ドリス宛の手紙はすべてヴィーダの死のことが示唆されていないかどうかを、夫がチェックした。ドリスは顔を輝かせて、“それは素晴らしく光り輝いている。私のようにママは見る事は出来ない。”と言う。ドリスは両目を病室のある一点に凝らして、“父が見える。父は私と一緒にいたがっている。”と言い、困惑した様子で“パパはヴィーダと一緒にいる。ヴィーダがパパと一緒にいる。私は行きます。”と言う。」(ここまではドリスの母による証言。)⁴⁰⁾

ここでは臨床死前のヴィジョンが問題になっている。この例では、ドリスは姉ヴィーダが父と一緒に現れたことに困惑しているから、ドリスが事前に姉の死をテレパシーによってそばにいた人から情報入手していた可能性はない。姉の病気はドリスに内密にされていたのだから、姉の死をドリスは予想することが出来なかったであろう。

- ⑤ W.Barrett の別の例：「John Alkin Ogle は 1879 年 7 月 17 日にリーズで死んだ。死ぬ約 1 時間前に亡くなった兄のヴィジョンを見る。その直後驚いたように、“ジョージ・ヘンリー！”と叫んだ。この時 J.A.Ogle は精神錯乱状態ではなかった。ジョージ・ヘンリーは彼の知人ではあったものの、特に親しい友人と言うわけではなかった。ジョージ・ヘンリーは 40 マイルも離れたメルボルンに住んでいて、そこからやって

きた J.A.Ogle の母は、ジョージ・ヘンリーが死んだのはたった 10 日前のことであつたし、そのことを知っているのは自分一人だけだったので、このことを聞いて驚いた。誰もジョージ・ヘンリーの死を J.A.Ogle に告げる人はいなかったし、J.A.Ogle に聞こえるところで話すこともなかったという。」⁴¹⁾ これは臨床死前のケースである。ジョージ・ヘンリーのヴィジョンが現れたことに A.J.Ogle は驚いているから、ジョージ・ヘンリーが死んだという情報をテレパシーによって、そばに居た母から事前に入手していたという可能性はない。

- ⑥ J.H.Hyslop (コロンビア大学教授) による報告：「ジェニーとエディトと言う二人の少女は親友同志だったが、1889年6月に二人ともジフテリアにかかって、ジェニーの方は6月5日(水)の正午に息を引き取った。エディトは重体なので、そのことを彼女には隠しておいた。死ぬ直前の6月8日(土)の正午に、エディトはジェニーに2枚の写真を渡して、自分のためにお別れを言うように両親にことづけた。その後エディトは、エディト自身もすでに亡くなっていることを知っていた友人達のヴィジョンを見たようであったが、突然驚いたように“パパ、どうしてなの？私はジェニーと一緒にしようとしているわよ。パパ、どうしてジェニーがここにいるって言ってくれなかったの？”という、まるで誰かを迎え入れるかのように、エディトは自分の両手を差し出して、“ジェニー、あなたがここにいてくれてとても嬉しい！”と言う。エディトは6月8日(土)の夕方6時30分に死んだという。」⁴²⁾ これは臨床死前のヴィジョンの例である。エディトがジェニーの出現に驚いて、父になぜかを問いただしていることと、死を覚悟して自分の2枚の写真をお別れにジェニーに渡すように両親に言づけていることから見て、テレパシーによって付き添っていた人達から、ジェニーが死んだという情報を入手した可能性はない。

- ⑦ I.ウィルソンによる事例：「1968年ジャネット夫人は、ジェーンを出産したが、赤子は二日後に肺炎で死亡した。その直後に100マイルほど離れた所で、ジャネットの祖母ジェーン・チャールズ夫人が臨終の時を迎えていた。ジャネットの父ジェフリー・チャールズは大事をとって母に、ジャネットが赤子を亡くしたことを隠しておいた。チャールズ夫人は、すでに亡くなっていた夫のジョンが現れたと、息子のジェフリーに言った。ジョンが赤子と一緒にいるのがよく分からないと、げげんそうな面持ちで言ったが、しばらくすると、“それはジャネットの赤ちゃんよ。可哀想なジャネット。”と言った。この事例の報告者は、ジャネット夫人とは長い付き合いであり、その実直さから見てこの話は信頼できるとしている。ジャネット夫人と彼女の父ジェフリー・チャールズの双方が、チャールズ夫人の死の直後に、チャールズ夫人の語った内容を書き留めていたので、時と共に尾ビレが付くことはないと言っている。」⁴³⁾ ここでは、臨床死前のヴィジョンが問題になっている。この例では、夫のジョンと共にジャネット夫人の赤子が現れたことを、祖母のジェーン・チャールズ夫人が不可解だと感じている点から見て、チャールズ夫人が、ジャネット夫人の赤子が死んだという情報

を、そばにいる人からテレパシーによって入手した可能性はないし、またジャネット夫人の赤子の死を予期していなかったことは確かである。どうしてそれがジャネット夫人の赤子であるということが分かったのかについては、記述からは不明であるが、チャールズ夫人は、ジャネット夫人が間もなく出産することは知っていたのかもしれない。

- ⑧ 最後に、その人が死んでいたことを知らなかった死者が同時に二人、死にかかっていた人の前に現れたケースを二つ紹介してみよう。「ある女性が出産直後、病室で意識が戻ると、突然部屋の上のコーナーの天井近くに立っている父のヴィジョンを見る。父は両腕に赤子を抱えていた。この女性は自分が産んだばかりの赤子のことが心配になり、何回も看護婦に問いただすが、“赤子は大丈夫だ。”という返事ばかりが返ってきた。そこでこの女性は夫に本当のことを言ってくれとせがむと、夫は赤子は死産だったこと、また彼女が入院中に彼女の父も突然死亡したことを打ち明けたと言う。」

44) この例は、臨床死前か後のものかは明確ではない。赤子の死を、この女性は看護婦と夫に問いただしていることから見て、事前に赤子の死についてテレパシーによって情報入手していなかったこと、また赤子の死を予想していなかったことは明らかである。

- ⑨ 「祖母が臨終の床についていた。彼女の一番末の息子フレッドが少し前に自動車事故で亡くなった。彼女の姉のルイーゼの死がそれに続いた。家族の者は、この二人の死を祖母には隠しておいた。夫は9年前にすでに死亡した。突然、祖母はベッドの上で上半身を起こすと両目を輝かせて、“夫が私を迎えに来た。どうしたことかフレッドとルイーゼも夫と一緒にいる。”と言った。それから数分後に祖母は息を引き取ったと言う。」⁴⁵⁾ これは臨床死前の例である。この場合も、フレッドとルイーゼが現れたのを見た時、祖母は驚いているから、両者の死をテレパシーによって周囲の人から読み取っていたという可能性はないし、また二人の死を予期していた可能性もないものと見られる。死んでいることに気付いていなかった死者が、同時に二人も現れたということは単なる偶然の一致と考えることは、さらに困難にする。

結 論

以上の事例の考察によって、次の点が明らかになった。

- ① 死に行く人に現れるのは死人のみで、生者の例はないのかどうかについては、今後信頼出来るデータを収集することで確認する必要がある。
- ② 死にかかっている人が、何らかの記憶によって、すでに死亡している知人のヴィジョンを見ることは当然のことであるが、本人が全く知らない死者が出現したり、その人が死んでいたことを本人が全く知らなかったし、予期もしていなかった死者が現れる事例が報告されており、死に行く人に現れるのが死者のみである場合には、これらは死者に関

する記憶による脳のイメージ現象としては説明できない。

- ③ ②で述べた事例も、数は少なければ単なる偶然の一致と考えることも可能であるが、数が多くなれば単なる偶然の一致の可能性は少なくなるであろう。この論文では、信頼の出来る事例のみ限定したが、査定を緩まれば他にもまだ多くの事例が報告されているし、今後も信頼出来るデータが見つかるであろう。それとも②の事例は全て幻覚なのであるか？
- ④ 臨床死前の死の間際の人に現れる死者と、臨床死後の臨死体験中に人に現れる死者との間には、本質的な相違はない。両方の場合に、その人が誰なのかが分からなかったが、後から誰なのかが判明した死者と、その人が死んでいたことを本人が知らなかった死者が、死に行く人に出現している。
- ⑤ 臨床死前後の人間の意識と脳の状態は、勿論日常の通常の状態ではない。日常の通常の状態を基準にして、臨界状態にある変性意識を判断することには無理がある。人間の通常意識に基づく常識は、地球上の表面に生きている一生物のものであり、宇宙に対して絶対的な基準となるようなものではないことは、今日では明白である。従って日常の通常意識を絶対的な判断の基準とせず、あくまでもオープンな姿勢で科学的な実証的研究を進めるべきである。
- ⑥ 一般的に言えば、実在する事物を取り違えて知覚してしまう現象を錯覚という。(例えば、縄を蛇と誤って誤認してしまう。) 実際には実在しない事物を実在すると信じてしまう現象を幻覚と呼ぶ。実在する事物を素材にして構成される仮想の世界(例えば夢)も、幻覚の一種であろう。夢から目が覚めれば、仮想の世界であることが判明する。死者はもう自然界には実在しないから死者のヴィジョンの出現は、通常の幻覚と考えられる。しかし、将来実現する事柄は、現在に実在しなくても幻覚ではないし、人間の知能能力は限定されているから、現在実在している事象であっても、人には知覚できないものが存在するし、日常の通常意識では知覚できない事柄でも、臨床死前後といったような非日常的な臨界状況では、知覚できる事柄も存在する可能性を初めから排除してしまうことは出来ないであろう。

[註]

- 1) Death Is of Vital Importance, New York: Station Hill Press, 1995, p.87; 死後の真実、日本教文社、1995、61～62頁。
- 2) The Study and Practice of Astral Projection, N.J. The Citadel Press, 1960, p.22.
- 3) K.Osis と E.Haraldsson の調査によれば、臨終の床にある人に、アメリカ人の場合、生者が17%、インド人の場合、生者が21%現れている。(At the Hour of Death, New York: Hatings House, 1990, p.65)
- 4) K.Osis & E.Hatraldsson, Hour, p.65

- 5) 夢が現実のデフォルメである例としては、例えば中国のミニヤコンカ峰から奇跡の生還をした松田宏也が、中国の病院に入院していた時、ベッドを国際医師団が取り囲んで、自分を凍傷のサンプルとして診断しているのを見た夢(立花隆、臨死体験上、235)や、毛利幸一と言う医師が入院した時、白い病衣に着替えさせられたのが原因で、白衣を着たお遍路さんになった夢を見たり、自宅にあるホルバインの木版画と同じ構図で、自分がキリスト姿になって十字架を担いでいるのを見た夢(脳卒中再体験記、東京書籍、1989、14~17)を挙げることが出来る。
- 6) M.Roth & M.Harper, Temporal Lobe Epilepsy and the PsychoAnxiety-Depersonalization Syndrome. Part 2, Comprehensive Psychiatry 3, 1962, 224
- 7) J.M.マクハーグ、心霊研究と精神医学、I.グラットン=ギネス編、心霊研究所収、技術出版、1995、312頁。
- 8) 土肥修司、麻酔と蘇生、中央公論社、1993、125~127頁。
- 9) 立花隆、臨死体験上、文芸春秋、1994、56頁。
- 10) 中原保、わたしの臨死体験、文芸春秋、1993、30~33頁。
- 11) 臨死体験上、60頁。
- 12) 中原保、臨死体験、25~26頁
- 13) 考案化声については、浜田秀伯、精神症候学、弘文堂、1994、191~192頁：大熊輝雄、現代臨床精神学、金原出版、1993、90、309、313頁：H.I.Kapland & B.J.Sadock,(ed.) Comprehensive Textbook of Psychiatry I, Baltimore: Williams & Wilkins, 1989, p.571.
- 14) 立花隆、臨死体験上、13~14頁。
- 15) 立花隆、臨死体験上、15頁。
- 16) M.M.Lawrence, Paranormal experiences of previously unconscious patients, in L.Coly & J.D.S.McMahon(eds.) parapsychology and Thanatology, New York: Parapsychology Foundation, 1995, p.135.
- 17) 例えば、D.S.Rogo, The Welcoming Silence, N.J.: University Books, 1973, p.63を見よ。
- 18) Closer to the Light, New York: Villard Books, 1990, pp.53~54.
- 19) 立花隆、臨死体験上、301~302頁。
- 20) Importance, p.88: 死後の真実: 59~60頁。
- 21) The Case for Heaven, New York: G.P.Putnam's Sons, 1995, pp.94~95.
- 22) 死後体験、未来社、1990、277~278頁。
- 23) 新死ぬ瞬間、読売新聞社、1985、309~311; Importance, 86~87; 死後の真実、104~105
- 24) Helping patients who've had near death experiences, Nursing 18, 1988, 36
- 25) 新死ぬ瞬間、308~309; Importance, 86~87; 死後の真実、105~106
- 26) M.Callanan & P.Kelley, Final Gifts, New York: Poseidon Press. 1992, 86~87
- 27) M.Morse, Parting Visions, Villard Books, 173

- 28) The Light Beyond,Bantam Books,1988,173
- 29) Death-^へ Vision,The Aquarian Press,1986,24~25
- 30) Visions,21~22
- 31) Visions 102~103
- 32) Human Personality and its Survival of Bodily Death,University Books,1962,226
- 33) Life at Death,Quill,1982,238~239
- 34) Study,30~31
- 35) John-Myers(ed.) Voices from the Edge of Eternity,Revell,1968,55=56
- 36) 臨死体験下、50~51
- 37) M.M.Lawrence,patients,135
- 38) M.Callanan & P.Kelley,Gifts,93~94
- 39) Transformed by the Light,Villard Books,1992,114~115
- 40) Visions,10~14
- 41) Visions,20~21
- 42) Psychical Research and the Resurrection,Small Maynard & Co.,1908,88~89
- 43) 死後体験、182~184
- 44) S.Smith,Life is Forever,G.P.Putnam's Sons,1974,74~75
- 45) A.Matson,The Waiting World,Turnstone Books,1975,30